

1 予報（8月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
さび病	-	多	(1) 7月下旬の巡回調査では、発生圃場率は平年よりやや高かった。(+) (2) 8月の降水量は平年並か多い予報。(+)
べと病	-	並	(1) 7月下旬の巡回調査では、発生は確認されなかった。(－) (2) 8月の降水量は平年並か多い予報。(+)
黒斑病・葉枯病	-	多	(1) 7月下旬の巡回調査では、発生圃場率は平年よりやや高かった。(+) (2) 8月の降水量は平年並か多い予報。(+)
ネギコガ	-	並	(1) 7月下旬の巡回調査では、発生は確認されなかった。(－) (2) 8月の気温は平年並か高い予報。(+)
ネギハモグリバエ	-	並	(1) 7月下旬の巡回調査では、発生圃場率は平年より低かった。(－) (2) 8月の気温は平年並か高い予報。(+)
ネギアザミウマ	-	並	(1) 7月下旬の巡回調査では、発生圃場率は平年より低かった。(－) (2) 8月の気温は平年並か高い予報。(+)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(－)：少発要因、(－)：重要な少発要因

2 防除のポイント

○さび病の発生が広く見られています。「令和5年度農作物病害虫防除速報第6号（令和5年7月12日発行）」を参照し、今後の発生増加に備えて、定期的な防除を実施しましょう。

【共通事項】

- 茎葉散布は散布ムラが生じないように畝の両側から丁寧に行う。
- 発生病害虫にあわせ、効果の高い薬剤でローテーション防除する。
- 圃場の土壌水分が高いと、べと病、黒斑病、軟腐病、白絹病等が発生しやすくなる。また肥料切れや肥料過多によって発生が助長されるため、適切な肥培管理に努める。
- QoI剤は、耐性菌の発生リスクが高いため年2回以内の使用とし、使用する場合は連用とならないように注意する。

【さび病・べと病】

- 気温が低下する8月後半以降に発病が多くなるため、定期的な防除を継続する。
- 降雨が続くと発生が増加するので、薬剤散布は降雨前に行う。

【黒斑病】

- 気温が低下する8月中旬頃から急増するため、予防散布や発病初期の防除に努める。

【葉枯病】

- さび病やべと病の病斑に二次的に感染するため、これらの病害にも効果のある薬剤を選択する。
- 褐色斑点病斑（図1左）は、ネギハモグリバエの食害痕上に二次的に感染している事例が確認されているため、栽培期間を通してネギハモグリバエの防除を徹底する（R2-2病害虫防除技術情報「ネギハモグリバエB系統の被害の特徴」参照）。
- 黄色斑紋病斑（図1右）の発生が9月頃から増加するため、収穫時期に合わせて、葉枯病の対策を中心に据えた防除を実施する。



図1 葉枯病の病斑
(左：褐色斑点病斑、 右：黄色斑紋病斑)

【ネギコガ】

- (1) ネギアザミウマの防除の際にネギコガにも効果のある剤を選択し、同時防除に努める。
- (2) 幼虫が葉肉内に侵入してからでは防除効果が劣るため、羽化時期から防除を実施する。
- (3) 有効積算温度から推定される、県中南部の第5世代の防除適期は8月第3半旬から第4半旬である。

【ネギハモグリバエ】

- (1) 圃場をよく観察し、被害の早期発見に努め、被害が確認された場合は薬剤散布を行う。

【ネギアザミウマ】

- (1) 圃場をよく観察し、被害の早期発見に努める。
- (2) 高温条件下では世代の経過が早いため（25℃では16～17日程度で1世代経過）、散布間隔が空かないよう注意する。
- (3) 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤でローテーション散布を行う。

3 防除上の留意事項

- (1) 収穫期が近い作型では、使用時期（収穫前日数）に特に注意して薬剤を選択する。
- (2) 薬剤選択にあたっては、耐性菌や抵抗性害虫の出現を回避するために、同一系統の薬剤を連用せず、異系統の薬剤をローテーションで使用する。